

平成 25 年度 地域志向教育研究費助成 成果報告書

奈良県立大学生の視点を活用した 高知県嶺北地域における観光開発提案事業

地域創造学部 准教授 千住 一

■ はじめに

本事業は、本学において観光学を学んでいる学生の有する視点、知識、感性などを有効的に活用しながら、高知県嶺北地域における観光開発に関わる提言および提案を行うことを目指し、一連の活動を行った。

高知県嶺北地域は、高知県北部に位置する大川村、大豊町、土佐町、本山町の 1 村 3 町から構成され、自然資源、文化資源を問わず多様な観光資源を有する。本事業では、「嶺北地域の資源を活用し、観光振興と交流人口拡大の取組を推進することにより、嶺北地域の活性化を図ること」¹ を目的とする「嶺北地域観光・交流推進協議会」² と協力し、諸々の活動を行った。

■ これまでの取組み

本事業の概要ならびに成果について述べる前に、本事業に関わるこれまでの取組みの概略を示す。以下は、これまでの取組みを時系列的に整理し、各活動の内容を端的に記したものである。

・ 2012 年 10 月 ～ 2013 年 2 月

協議会との共同事業実施に向けて、高知県、協議会、本学担当者³、本学学生有志が参加するミーティングを複数回実施。

¹ 「嶺北地域観光・交流推進協議会規約」第 2 条。

² 嶺北地域観光・交流推進協議会は、本山町、大豊町、土佐町、大川村、本山町観光協会、大豊町観光開発協会、土佐さめうら観光協会、大川村ふるさとむら公社、高知県立嶺北高等学校、ゆとりすとパークおおとよ、嶺北地域 3 商工会（土佐地区商工会、本山町商工会、大豊町商工会）の代表、高知県から構成される。「嶺北地域観光・交流推進協議会規約」第 4 条。以下、嶺北地域観光・交流推進協議会を協議会と略す。

³ 千住一。

・2013年3月20日～22日

本学担当者が学生有志20名⁴を引率して、嶺北地域を訪問⁵。
第1回プレゼンテーションのための調査を実施。
協議会との打ち合わせを実施。

・2013年4月～6月

第1回プレゼンテーションの実施に向けて、協議会、本学担当者、学生有志が参加するミーティングを複数回実施。
第1回プレゼンテーションを2013年6月に本学にて実施することを確認。
第1回プレゼンテーションに向けて、嶺北地域に関する追加的情報を収集。

・2013年6月22日⁶

本学と協議会が包括的連携協定を締結。
3月に嶺北地域を訪問した学生有志が、「食・みやげ」、「観光資源」、「情報発信」、「施設」の4グループに分かれ、嶺北地域における観光事業提案に関する第1回プレゼンテーションを実施。
第2回プレゼンテーションを2014年1月に嶺北地域にて実施することを確認。

・2013年8月26日～28日

学生有志8名⁷が嶺北地域を訪問。
第2回プレゼンテーションのための調査を実施。
協議会との打ち合わせを実施。

・2013年9月26日～28日

学生有志8名⁸が嶺北地域を訪問。
第2回プレゼンテーションのための調査を実施。
協議会との打ち合わせを実施。

■ 事業の概要

上記した「これまでの取組み」を踏まえ、本事業では、2014年1月の嶺北地域におけるプレゼンテーションを柱に据え、一連の活動を実施した。本助成採用以降は、学生有志を中心にプレゼンテーションに向けての準備作業を本学において行い、1月までに複数回のミーティングを開催するとともに、これまでの嶺北地域における現地調査の際に収集するこ

⁴ 2回生11名、1回生9名。学年は当時のもの（以下、同じ）。

⁵ その模様をテレビ高知が取材、20日夕方のニュース番組内で放送された。

⁶ 協定締結および第1回プレゼンテーションは、本学にて実施された。なお、当日の様子は、『高知新聞』に掲載された。『高知新聞』2013年6月23日付け27面。

⁷ 3回生5名、2回生3名。

⁸ 3回生5名、2回生3名。

とのできた各種データの整理および精査を繰り返した。

また、第 2 回プレゼンテーションでは、第 1 回プレゼンテーションと同様に「食・みやげ」、「観光資源」、「情報発信」、「施設」の 4 グループに分かれ、それぞれの視点から嶺北地域における観光開発に関わる提言および提案を行うこととなったが、プレゼンテーションに際して必要な追加的データは、適宜、協議会を通じて入手した。

プレゼンテーション当日は、協議会関係者のみならず、多数の嶺北地域住民の方々にお集まりいただき、プレゼンテーションに関する活発な質疑応答および意見交換を約 2 時間にわかって行うことができた。加えて、プレゼンテーションの前後の時間を活用し、本事業に関わる追加的な調査および聞き取りを実施した。

プレゼンテーション実施後は、本学にてプレゼンテーションにおける成果についての情報共有を行うとともに、特に質疑応答および意見交換でのやりとりについての振り返りやディスカッションを実施した。加えて、協議会とは、2014 年度以降における取り組みについての打ち合わせをプレゼンテーション実施後から開始し、これまでの一連の活動における反省を踏まえながら、2014 年度以降もより有効的な事業運営を目指して協働していくことを確認した。

■ 事業の成果

ここでは、2014 年 1 月 17 日に嶺北地域において実施した第 2 回プレゼンテーションに関わる成果について重点的に記述する。第 2 回プレゼンテーションの概要は以下のとおりである。

・実施日時

2014 年 1 月 17 日 (金) 14 時から

・場所

本山町議会事務局 2 階 会議室 (高知県長岡郡本山町本山 506-3)

・参加学生

地域創造学部 3 回生 玉井 由介
地域創造学部 3 回生 堀田 望
地域創造学部 3 回生 前田 拓
地域創造学部 3 回生 山本 まどか
地域創造学部 2 回生 谷澤 康之
地域創造学部 2 回生 二階 智美
地域創造学部 2 回生 野原 早苗
地域創造学部 2 回生 早川 千晶

・嶺北地域からの参加者数

約 30 名

当日は、協議会会長の川村雅士氏より開会の挨拶があった後、「情報発信」⁹、「施設」¹⁰、「食・みやげ」¹¹、「観光資源」¹²の順にプレゼンテーションを行った。

「情報発信」に関するプレゼンテーションでは、これまでの現地調査および情報収集の成果を踏まえ、まず、リピーター客獲得のための方策の必要性、一般的な広告媒体以外を活用した情報発信の可能性、特に嶺北地域特有の「食」を観光資源とした観光客誘致策の重要性を提示した（例えば、後述の「食・みやげ」グループが提示するような特産物を活用したメニュー開発や「食」に関するセミナーの開催）。

次いで、より具体的な方策として、嶺北地域における歴史資源や歴史的背景を踏まえたかたちで情報発信を行うことや、嶺北地域の「入り口」的存在である大豊町に関する情報発信を工夫・強化することにより、嶺北地域への観光客導入を図ること、嶺北地域に関する情報を十分に伝えて宿泊を促すことにより、「通過」されない観光地づくりが行われることなどについて言及した。

「施設」に関するプレゼンテーションでは、これまでの現地調査および情報収集の成果を踏まえ、まず、嶺北地域における観光客向け案内板およびトイレの整備に関する指摘を行った。案内板に関しては、サイズが小さく数も少ないことから、サイズを大きくするとともに、記載する情報量・設置場所ともに増加させる点について言及した。トイレに関しては、設置されているトレイが少ないことから、観光客が立ち寄るスポットに可能な限り公共トイレを設置するとともに、既存施設のトイレを公共型トイレとしても併用して活用する案を提示した。

次いで、嶺北地域における宿泊施設に関する指摘を行い、現状では団体客向けの設備を伴った宿泊施設が多い点に着目し、小・中規模部屋の増設、個室のシャワーブース設置、バリアフリー設備の充実などについて言及した。また、現在、建替え、増築、改装、修繕などが検討されている宿泊施設に関しては、長期滞在客への対応、嶺北地域の特産物および加工品を提供するレストランの設置（例えば、後述の「食・みやげ」グループが提示するような特産物を活用したメニューの提供）、屋上庭園やバーベキュー施設といったレクリエーション関連設備の充実などが必要であると主張した。その他、宿泊施設周辺に存在する各観光資源との有機的連携や（例えば、後述の「観光資源」グループが提示するような早明浦ダムとの連携）、宿泊施設の利用を盛り込んだ旅行商品の提案などについても言及した。

「食・みやげ」に関するプレゼンテーションでは、これまでの現地調査および情報収集の成果を踏まえ、まず、嶺北地域の特産物を活用した「赤牛肉巻き」、「米粉の唐揚げ」、「野菜のバーニャカウダ」といったメニュー開発の可能性について指摘した。

次いで、嶺北地域における「食」に関するセミナー開催についての提案を行い、それに

⁹ 「情報発信」グループに所属する学生は以下のとおり。3回生：大日向眞季、溝尻茜、村田悠輔。2回生：谷澤康之、二階智美。

¹⁰ 「施設」グループに所属する学生は以下のとおり。3回生：藤田純礼、保田桃子、山本まどか。2回生：近藤瞭太、早川千晶。

¹¹ 「食・みやげ」グループに所属する学生は以下のとおり。3回生：玉井由介、戸高彩百合。2回生：大下紗季、横田紘大。

¹² 「観光資源」グループに所属する学生は以下のとおり。3回生：木崎有紗、堀田望、前田拓。2回生：小林由季、野原早苗。

より、嶺北地域内で「食」あるいは「食文化」という観光資源に対する興味・関心や認知度が向上する点、地域住民を巻き込んだかたちでのメニュー開発が可能になる点などを提示した。加えて、嶺北地域の特産物を活用したメニューを地域内の各施設で観光客向けに提供、販売することの可能性についても言及した。

「観光資源」に関するプレゼンテーションでは、これまでの現地調査および情報収集の成果を踏まえ、まず、嶺北地域の有力な観光資源のひとつである「早明浦ダム」を取り上げ、ダム施設を活用したレジャー活動やアクティビティの有効性について言及した。

次いで、嶺北地域に存在する住民団体やダム近郊に存在する宿泊施設と有機的な連携を果たすことにより、観光開発を通じて、特に若年層の地域住民を主体としたより魅力的な地域づくりが達成される可能性について言及した。

以上のような内容で「情報発信」、「施設」、「食・みやげ」、「観光資源」に関するプレゼンテーションを行った後、約 2 時間にわたり、嶺北地域からの参加者とのあいだで質疑応答および意見交換を行った。

「情報発信」に関しては、嶺北地域の住民に対する意識調査を実施することの必要性や、情報発信を行う際のターゲットおよびコンセプトを選定することの重要性が指摘されたほか、他地域における情報発信に関する成功事例や問題点を調査・精査した上で、嶺北地域に合致した情報発信のありようが模索されるべきだとの意見が提出された。

「施設」に関しては、客観的なデータの必要性が指摘されたほか、必ずしもリピーターを前提とした議論を行わなくても良いのではないかと、予算をかけずに実行することのできる方策を提案して欲しいなどといった意見が提出された。また、現在、建替えを検討している宿泊施設に関しては、施設内に嶺北地域 4 町村の共有スペースを設置する案、建替えに際して嶺北地域住民の意見を十分に反映させる案、現在の立地から移動させる案、温泉を掘削する案など、多数の提案が提示された。

「食・みやげ」に関しては、嶺北地域における既存施設との具体的な連携のありようについての可能性のほか、住民団体や農業従事者との連携といった嶺北地域の住民に主眼を置いた交流のあり方に関する指摘がなされた。

「観光資源」に関しては、嶺北地域の住民のなかでも特に若年層に対する意識調査が必要であるという指摘があったほか、地域住民だけではなく観光客などの域外居住者も参加して意見交換などを行う、議論の「場」を創出することの重要性などが指摘された。

■ おわりに

以上が、「平成 25 年度 地域志向教育研究費助成」にもとづいて実施された「奈良県立大学生の視点を活用した高知県嶺北地域における観光開発提案事業」の概要ならびに成果の詳細である。

本事業の成果について、本助成の趣旨である「地域志向教育研究」の観点から整理し直すならば、以下のとおりである。

第一に、本事業を実施するにあたり、現地調査にもとづく各種データの収集、プレゼンテーションを目的とした収集データの整理および精査、追加的データの収集、調査地である嶺北地域におけるプレゼンテーションの実施、地域住民との質疑応答および意見交換と

いう一連のプロセスを経ることができた点である。これは言うまでもなく、現地における調査の実施、収集データの整理および加工、研究成果の成形、調査地に対する研究成果の還元というフィールド型教育の典型的なありようであり、現在、本学が取り組んでいる新規教育課程において求められている教育手法の研究という観点において、多大な知見を獲得できたと考えている。

第二に、嶺北地域における観光開発という事案に対して、協議会という学外団体と協働しながら学生主体で取り組むことができた点である。上記したとおり、現在、本学が取り組んでいる新規教育課程においては、学生による自主的な学修、特に地域社会と関係を持ちながら行われる学修のありようが模索されている。この点において、本事業では、自由意志で参加した学生が中心となって企画・立案を行い、協議会と連絡・交渉を実施し、実際に事業を運営するという循環をつくりだすことに成功したと言え、現在、本学が取り組んでいる新規教育課程におけるひとつのモデルを確立することができたと考えている。

第三に、本事業における一連の活動を経て、参加学生のなかに明確な問題意識が確立されるとともに、社会性構築の芽生えを看取することができた点である。前者に関しては、座学を中心とした学内における教育の成果が学外での主体的な経験と有機的に結びつくことにより、より高次の知的好奇心や知的欲求を涵養する契機となり得ることを指し示す一事例であると言える。後者に関しては、学生間の意見調整や学外者との連絡・交渉を主体的に経験することにより、複数の利害を調整してひとつの立場を構築する能力や、そうしたプロセスを経て構築された立場を学外者に対して論理的に説明・提示しながら交渉を進めていく能力が確立されたと位置付けられる。

以上より、本事業での一連の取組みを通じ、現在、本学が新規教育課程のもとで推進しているプロジェクト型科目あるいはフィールド型科目における教育手法や教育効果に対して、有意義かつ多角的な実証データを多く獲得することができたと結論づけたい。

最後になったが、学生主体による教育研究という本事業の趣旨をご理解いただき、学生とお付き合い下さった協議会および嶺北地域の皆様、特に、関連業務を抱えるなか、様々な場面でこちらからのあらゆる要望に迅速にご対応いただいた事務局の時久恵さんに、心より御礼申し上げたい。どうもありがとうございました。

■ 資料



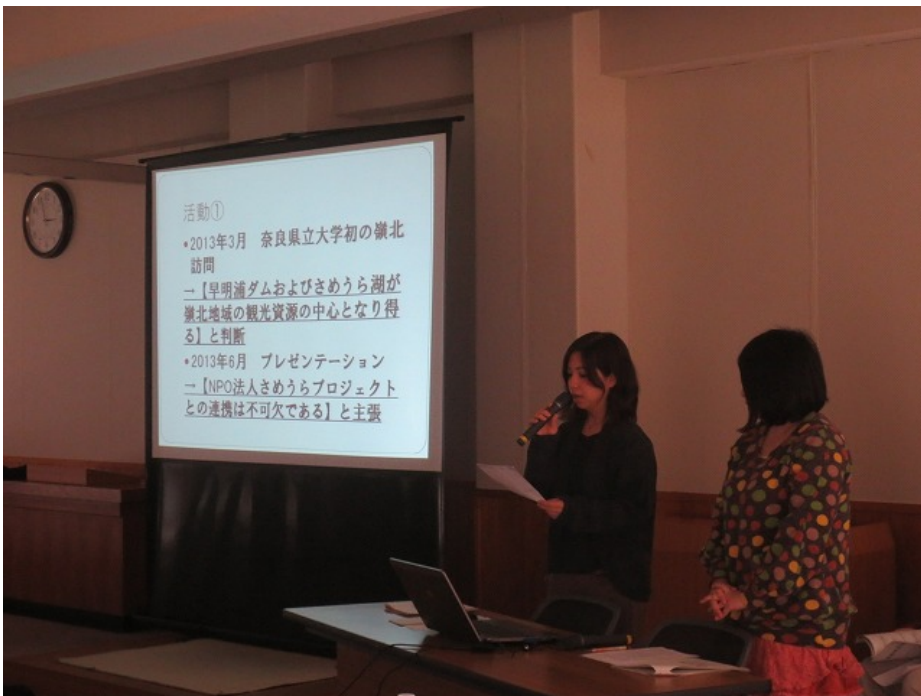
「情報発信」グループによるプレゼンテーション（2014年1月17日）



「施設」グループによるプレゼンテーション（2014年1月17日）



「食・みやげ」グループによるプレゼンテーション (2014年1月17日)



「観光資源」グループによるプレゼンテーション (2014年1月17日)